

「ごめん、フレデリカ、ごめん、ユリアン。ごめん、みんな……」
それで、終わったはずだった。

転生していないが スライムになった件

「……………ええですか？ 聞こえますか？ 聞こえたら答えて下さい」

響いてきた「声」に、彼の意識は浮上した。

「答えて下さい。聞こえますか？ 聞こえますか？ 聞こえますか？ 聞こえたら答えて下さい」

とにかくうるさい。頭のなかいつばいに響き渡る「声」。こっちは静かに催眠をむさぼっていたのに。

「まあ、「聞こえている」のは事実だし、答えないと延々繰り返されそうだ。

しかたないな、と意識の中でため息をついて、彼は答えた。

「聞こえてる」

一瞬、「声」は途絶えた。完全なる沈黙。

「なんだ？ と彼が「身構えた」とき、すさまじいほどの「歓声」が聞こえてきた。

「やったあああああ！」

「やった、やりましたよ、聴覚の復活、意思疎通に成功！」

「さて、さてさて落ちて落ちて落ちて。まだ救えたとは限らんぞ、自己

同一性は……………」

意思疎通？ 自己同一性？ なんのことやら。

そう思っている彼に、次なる「声」が聞こえた。

「あなたは、誰ですか？」

「はあ？」

わかりきった質問ではないか。彼はおのれの名前を即答した。

「ヤン・ウエンリー」

次の瞬間、先ほどの歓声の爆発がまたしもかわいく思えるほどの、聴覚の暴力が襲ってきた。

「や、やったあああああ！」

「提督が、助かった……………」

「よ、よかつたよかつた、これで死んでいった者も報われる……………」

周囲で荒れ狂っているらしい歓喜の暴風雨の中で、その中心たる彼だけは、台風の目のように取り残されていた。

な、なんだつていうんだ。この状況はなんなんだ。

「声」は聞こえるけれど何もわからない。ずばりいって「声」以外何も認識できない。つまり見えない。死ぬとき、最後まで残るのは聴覚だ、とかいう話を聞いたことがあるが、どうやらそれは

真実であつたようだ。

しかしこの状況で放っておかれるのは困る。

「一体何なんだ、説明してくれ！」

彼の「叫び」に歓声の暴風雨はおさまった。最初に聞こえた「声」

がゆっくりと語り始めた。

「落ちて落ちて落ちて下さい、ヤン提督。あなたは……………」

「脳だけが生きている状態です」